

浄めの風の神話

かつて、心の奥深くに湯殿がありました。
そこは、長いあいだ閉ざされ、湯気も立たぬまま、
過去の思いの沈殿が底に積もっていたといいます。

ある朝、女の巫(みこ)は、二柱の男の霊とともにその湯殿へと降りました。
一柱は、静かに物事を見定める男。もう一柱は、あどけない少年。
理と感情——ふたつの流れが、初めて一つの場所で働こうとしていたのです。

彼らは手に布を持ち、壁を磨き、底をこすり、
こびりついた垢を剥がしながら、心の澱を湯とともに洗い流しました。
その最中、巫の体から、長く封じられていた風が漏れ出しました。
それは、誰もが避けたい臭気を放ちましたが、
同時に、彼女の内に溜まっていた悲しみや羞恥の息でもあったのです。

「閉ざされた窓を開けよ」と、静かな男が言いました。
彼らは窓を大きく開け放ち、濁った空気を空へ送り出しました。
風が流れ、光が射し込み、湯殿の壁はほの白く輝きました。

やがて巫は、山裾の学校のそばにある部屋を訪れます。
そこには、若き娘の霊が住んでいました。
娘は言いました。
「この部屋、あなたが学びの旅に出るとき、空いています。使ってください。」

巫は微笑み、深く礼をして、その部屋を借りました。
それは、彼女が新しい知と感性を宿すための“心の間”でした。
湯殿を浄め、風を通したあとに現れた、新しい棲み処。

こうして、巫は“浄めの風の神”の祝福を受け、
風とともに歩き出しました。
その道の先では、
清められた水と新しい知が、静かにひとつに溶け合っていたといいます。